

ジュリアン・グリーンの△青春▽（二）

——一九二二年七月から一九二四年十一月まで——

井上三朗

目次

- 一 はじめに
- 二 感情生活
- 三 肉体生活
- 四 信仰生活
- 五 おわりに

（太字は今回掲載分）

では今度は、帰仏後のグリーンンの肉体生活を概観することにしよう。留学時代、グリーンンはマークへのプラトニックな愛とは別に、ニコルズへの「動物的な」(『遙かな土地』V、一一四九頁)愛に悩まされていた。また、休暇でサヴァナに行つたとき、一人の水兵に遭遇し、欲望にとらえられたこともあつた。グリーンンにとって、若者たちの美しい顔は、あるいは肉体は、それに人間の裸体を表現した彫像は、肉体的苦悩をひき起こすものとしてあつた。事情は帰仏ののちも変わらない。むしろ肉の懊悩は、フランスにもどつてから、ますます深刻になる。

帰仏後、グリーンンはあるロシア人の若者と出会うことによつて、肉の苦しみを知る。この出会いは自伝『青春』の第十八番目の断章^②で回想されている。一九二二年当時、彼の兄のチャールズとその家族は、パリに滞在し、フォースタン^①エリー通りの下宿屋に住んでいた^③。グリーンンはよくチャールズの妻、つまり義理の姉を訪ねることがあつた。ロシア人との邂逅は義理の姉のもとを去つたあとになされる。

「ある日、彼女〔義理の姉〕のもとを去つたとき、下宿屋に入ろうとしている若者と私はすれ違つた。その顔は、私に強烈な印象を与えた。彼のとても白い肌と、こめかみのほうに伸びた黒い目は、彼がスラヴ人だと思わせた。多分いくらか急いで私は、彼が亡命中のロシア人だと結論した。そして長い間、彼が再び現われるのを待った。なにしろ、彼は私をちらつと見、私は彼のまなざしの中にいくつかの心づもりを読みとつたように思ったからだ。上品な服を着、とても均整のとれた彼は、電撃的な仕方^④で私を眩惑した。しばらく私は小さな広場の界隈をさまよい、デボルド^⑤ヴァルモール通りを上つたり、下つたりした。すると期待していたことが起こつた。青年は下宿屋から出てきて、私の姿を認め、思うに暗黙の同意を与える様子で私を眺めた。読者は私の言うことを信じてくれるだろうか。私は顔をそむけてから、反対の方向に進んだ。なぜそうしたかは訊かないでいただきたい。私にはその訊がけつてわかつたことがないからだ。

私のなかの多くの事柄が、私には理解できないままであった。私はほとんどすぐさまひき返した。しかし若きスラヴ人は姿を消していた。私は、あたかも大地が彼を呑みこむために半ば口を開いたかのように、そのことに茫然としていた。あちこちの方向を歩き、それから走りながら、私は見知らぬ人を再び見つけようとした。むなしい追跡だった。

私は悲しみの状態で帰宅した。その悲しみは大学でのもつとも暗澹とした日々を思い出させた。パリですべてがまた再びはじまるのだろうか。それにしても通りで誰かに近づいて話しかけるために、どうふるまえばよいのだろうか。それにその誰かが《同意する》と誰が私に言うことができるだろうか？ というのも、まさしくそのことだけが問題であるからだ。ここには、自尊心が介入していた。私は拒絶されることにあまりにも苦しんだことであろう。だが私ははげしい絶望とともに、若きロシア人を欲していた。彼は、私がパリで見かけた最初の美しい青年であった。なんだかわからない、ばかげた推論によって、私は、彼がただひとりの美青年だと信じこんでいた。想像力も手伝って、私は部屋のなかで彼を見、彼に話しかけていた。その切れ長の目には、恐ろしく挑発的な仕方で、快樂への、あまりにも明瞭な誘いがあった……私を理解するには、彼には一秒間だけで十分だったのだ。もしかして彼は今、ポソス広場の片隅で私を待っているかもしれない。気違いのようにコルタンベール通りを下りながら、私は広場にもどった。もちろんそうではなかった。彼はそこでも、界限のほかの所でも待つてはいなかった（V、一二九六頁）。

長い引用文になってしまったが、ここではロシア（スラヴ）人との邂逅をとおして、美との出会いが語られている。グリーンは第二段落で、「彼は、私がパリで見かけた最初の美しい青年であった」と言い切り、さらに、「私は、彼がただひとりの美青年だと信じこんでいた」と付け足している。そして美は、もしくははこの若者は、グリーンに肉体的な欲望をいだかせる。このことは、第一段落の、「彼は、電撃的な仕方で私を眩惑した」という文からうかがえるし、第二段落の、「私ははげしい絶望とともに、若きロシア人を欲していた」という文からもたしかめることができる。グリーンにおいて、美の誘引は、肉なるものの誘惑を意味する。

この出会いの場面において、相手の若者がグリーンの気持ちを見抜いているように見えることが、注目に値する。後半の段落の終わりのほうで、グリーンは、「私を理解するには、彼には一秒間だけで十分だったのだ」と推考している。また前半の段落で、グリーンは自分を一瞥した若者のまなざしの中に、「いくつかの心づもり」(des intentions)を見てとっている。intentions は△意図▽とも訳せる。若者はいかなる△心づもり▽△意図▽を有していたのだろうか。グリーンを肉なるものに誘う△意図▽であり、グリーンとひとときをすごしてもよいという△心づもり▽である。その証拠に、下宿屋から出てきた青年は、「暗黙の同意を与える様子で」グリーンを眺めている。帰宅したグリーンは、「その切れ長の目には、恐ろしく挑発的な仕方、快樂への、あまりにも明瞭な誘いがあった」と振り返っている。けれども、グリーンはこの「誘い」をはねつけ、はじめの段落で述べているように、「顔をそむけてから、反対の方向を進」み、青年から遠ざかっている。それはなぜか。その理由として、グリーンは性格の内気さが挙げられる。それに加えて、あとの段落で、「ここには、自尊心が介入していた。私は拒絶されることにあまりにも苦しんだことであろう」と顧みているごとく、若者に接近しても、拒絶されることを恐れたからでもある。なるほどグリーンは、若者の視線から、「いくつかの心づもり」、そして「快樂への(∴)誘い」を読みとっている。しかしこれらはグリーンの主観的な印象にすぎない。実際、話しかけてみて、自分が受け入れられるかどうかは、はっきりとはわからない。この点にかんして、グリーンが人から愛されれないという意識をいだきつづけてきたことを指摘しておきたい。グリーンは『青春』のなかで、「私は人から愛されれない者たちのひとりに自分を数えていた」(V、一四五六頁)と告白している。この愛されれないという意識は、十五歳の頃、長姉エレオノールの夫である義理の兄から、「私は、お前の顔以上に醜い顔をいままでに一度も見たことがない」とたしかに思うよ⁽⁴⁾と宣告されたこと⁽⁴⁾によって芽生えた。グリーンが若者への接近をこころみないのは、この意識が関係しているかもしれない。

しかしながら、グリーンが若者から遠ざかるのは、何よりもまず、美Ⅱ肉なるものへの瞬間的な反撥のせいであろう。若者の美しさはグリーンを惹きつけ、欲望をいだかせる。だが純粹志向が働いて、彼は美Ⅱ肉なるものを拒否する。それは快

樂（を享受すること）の忌避でもある。美 \parallel 肉なるもの、快樂は自己の純粹さをおびやかす、汚すものとして拒まれるのである。とはいえ、この拒絶はグリーンに悔恨と苦しみを残す。グリーンは青年から離れたあと、「ほとんどすぐさまひき返し」、青年を「再び見つけ」るべく、「むなしい追跡」をつづけている。さらに「悲しみの状態で帰宅し」てからも、青年のことを思い出し、「もしかして彼は今、ポソス広場の片隅で私を待っているかもしれない」と憶測して、「広場にもどつ」ている。こうしたふるまいは、肉体的欲望にとりつかれたグリーンの姿を浮かび上がらせる。またグリーンはポソス広場に赴く前、部屋のなかで、「彼を見、彼に話しかけてい」る。グリーンの欲望の強さは、若者の幻を見させるほどなのだ。純粹志向は欲望の対象を忌避させるけれども、かえって欲望をつのらせ、グリーンを苦しみの深淵におとし入れるのである。

ロシア（スラヴ）人との出会いのあと、グリーンは \wedge グランド・ショーミエール \vee のアトリエで美しい若者を見つけ、苦しんでいる。すでに述べたように、グリーンはアメリカからもどつたあと、「画家になることを目指し、 \wedge グランド・ショーミエール \vee というアトリエにかようことになる。ある日、このアトリエの中に入ったとき、グリーンは、「容貌が感じのよいように思える」（『青春』V、一三一―三五頁）若者を発見する。だがグリーンはその若者に近寄らず、「彼からできるだけ遠くに離れたところに腰かけ」る（V、一三一―三五頁）。若者をよりよく観察するためである。若者はグリーンにほほえみかける。ところが、グリーンは目をそらせる。このあと、グリーンは若者の「魅力的」（V、一三一―三五頁）な顔を盗み見ては苦しむ。内心の声が、「なぜこころみないのか？ 彼はほほえみ、ほとんど絵を画いていないのに」（V、一三一―三五頁）ととがめる。もしかして若者はグリーンが話しかけてくるのを待っているかもしれないのに、グリーンは若者に近づかない。『青春』のなかで、グリーンはこのときのことを、次のように思い起こしている。

「私は別の角度からモデルをスケッチするために、彼に近づくこともできたであろう。ちようど、美しい青年の左側には空いている席があった。だが私は決断がつかなかった」（V、一三一―三五頁）。

かくしてグリーンは、青年に話しかけることなく、一時間後、「悲しみにさいなまれて」、アトリエを出、家路につく（V、

一三二六頁)。グリーンは自室のベッドに身を投げ、「この情け容赦のない、永遠の抑えがたい欲望をいだいて生きるくらいなら、死んだほうがましではないか」と自問する(Ⅴ、一三二六頁)。グリーンがアトリエの美しい青年に接近できなかったのは、もちろん勇気がなかったからである。と同時に、美Ⅱ肉なるものを前にしての誘引と反撥もまた関与している。ロシア人との出会いの際と同じように、△グラント・シヨームイールⅤで見目麗しい青年を目撃して、グリーンは美(肉)の誘引をうける。だが純粹志向を有するがゆえに、グリーンは美(肉)なるものを忌避する。とはいえ、忌避したことによって、かえって逆にあらがいがたい欲望に支配され、肉体的苦悩のなかにおちいるのである。

グリーンは『青春』のなかで、ウィリアム・ブレイク論を書いていた頃の思い出として、ということはずなわち、おそらく一九二三年の春ごろの思い出として、通りで美しい顔を見ることの苦しみを披瀝している。

「家でものを書いたり、絵を画いたりしないときは、私は『残っている古いパリ』というぼろぼろになった本を小脇にかかえて、通りに沿ってさまよい歩いてきた。今でもその本は持っている。

往々にして、建築の威光によってではなく、一瞬かいま見た顔の魅力に動転させられて帰宅したと言ふ必要があるだろうか。私の最初の反応は逃げ去ることだった。いつまでも見知らぬ美しい人を眺めることによって、自分がいかなる苦しみに身をさらしているかを、知りすぎるほど知っていたからであった。あの口、あのまなざし、頬の美しい輪郭まで、すべてが消し去りがたい線で私の記憶に刻まれようとしていた。避けなければならぬのはそのことだった。残酷で魅惑的なイメージを頭のなかに持ち運んではいけなかった。さもなければ、そのイメージの絶対的権力に何日間も何日間も耐え忍ばねばならなくなるからだ」(Ⅴ、一三二八―一三二九頁)。

美しい顔を見ることは、グリーンにとって、苦しくて恐ろしい体験であった。第二段落のはじめに、「往々にして、(…)一瞬かいま見た顔の魅力に動転させられて帰宅した」と打ち明けられている。美しい顔を「かいま見」るだけでも、グリーンは「動転させられ」る。つまり内的混乱におちいる。では、美しい顔をじっと見つめるとどうなるのか。「あの口、あの

まなざし、頬の美しい輪郭まで、すべてが消し去りがたい線で私の記憶に刻まれようとしていた」と記述されているように、それは顔のイメージを細部に至るまで記憶のなかに定着させることである。そして「そのイメージの絶対的権力は何日間も何日間も耐え忍ばねばなくなる」とさいごに書かれているごとく、美の支配下に何日間も置かれることである。美の支配下に置かれるとは、通りで一瞥した美しい顔を、ほとんど幻として、現前するものとして見ることなのである。幻を見させるものが、グリーンのかなかの欲望であることは疑いを容れない。美は幻を見させるほどにはげしい欲望をひき起こす。だからこそ、「私の最初の反応は逃げ去ることだった」と告げているように、グリーンは美を前にして、忌避の姿勢をとるのだ。引用した文章からは、『幻視家』グリーン誕生につながる、強烈な彼の肉欲を認知することができる。それゆえ、まずもって『欲望の人間』としてのグリーンの姿が浮き彫りになる。

グリーンが『欲望の人間』であることは、『青春』のなかの、欲望にかられて夜の散歩に出かけるという挿話によってはっきりと見定めることができる。一九二三年三月のある晩、夕食後、家族はアンヌを除いて食堂に残っている。父親とリュシーはランプをやっつけていて、マリーがそれを見まもっている。一家団欒のひとつときである。けれどもグリーンは「性的な飢え」(V、一三四八頁)を内にかかえていて、家庭の雰囲気溶けこむことができない。彼は突然、外出することを決意する。

「もし人が欲望のために病むことができるのであれば、私はその晩、まさしくそうであった。けっして所有するはずがないと思っっているものを、私の想像力は私を苦しめる正確さで見せていた。一つの美しい顔が別の美しい顔に席を譲った。そして突然、私が今いるこの部屋が、牢獄と同じくらい耐えがたく思われた。」

突然……私は自分の見知らぬ人間になったような気がし、不意に力が与えられたような印象をうけた。私は本を片づけるためであるかのように立ち上がり、今でも聞こえるような気がする声で、ただ、「外出してくるよ」とだけ言った。

この決心はいかなる驚きもひき起こさなかった。実際、寝る前に短い散歩をすることがあったからだ。父は顔を上げさえもせずに、あまり遅く帰らないようにと言った。三分と経たないうちに私は外にいた」(V、一三四八頁)。

グリーンは家にいるのがいたたまれなくなって、不意に「外出してくるよ」(Je vais sortir.)と言い放ち、家をあとにしている。その理由は、はじめに説明しているように、彼が「欲望のために病」んでいたからである。言いかえれば、欲望に弄ばれていたからである。グリーンは美しい顔を次々と思い浮かべる。すると、「私が今いるこの部屋が、牢獄と同じくらい耐えがたく思われた」と述懐しているごとく、家が「牢獄」のように感じられてくる。それはなぜか。家が自分を閉じて、欲望の解放を妨げる檻のごとき装置に思われるからだ。グリーンが外出するとき、今までの夜の散歩の場合とはちがって、欲望に身をゆだねていると判じうる。グリーンは第二段落で、「私は自分の見知らぬ人間になったような気がし」たと言っている。この感覚は、自分が《欲望の人間》に変貌した、ないしは、それになりきったことから生じている。またグリーンは、外出する前、「不意に力が与えられたような印象をうけ」ている。この「力」は、彼のうちで突如沸き起こった肉体・欲望のエネルギーに等しい。このように、ここでの夜の散歩は、グリーンのなかの欲望によって産み出されたものなのである。次に、グリーンが外に出て、夜の街をさまよい歩いているときのことを追憶した部分を見てみることにしよう。

「誰か。誰でもよいというわけではない。美しく、同意するような、私と同年輩の誰か。私が思い浮かべる、少し漠然とした、この型にはまった表現は、大いなる無知を隠していた。私は自分が何を欲しているかを、正確には知らなかった。私の官能的な夢想は、ほとんど何も私に教えてくれなかった。しかしすべての夢想は、顔の美しさを要求していた。さもなければ、何も可能ではなかったからだ。幼年時代から内心にかかえていた、オリンポスの永遠の神々を、私は探しもとめていたのだ」(V、一三四九頁)。

グリーンは彷徨中、「誰か。(…)美しく、同意するような、私と同年輩の誰か」と心の中でつぶやいている。また彼は、「幼年時代から内心にかかえていた、オリンポスの永遠の神々を、私は探しもとめていたのだ」と伝えている。グリーン夜の散歩は何よりもまず、美の探求である。このことは、「すべての夢想は、顔の美しさを要求していた」と確認されるところから歴然としている。とはいえ、グリーンはこの一節で、「私は自分が何を欲しているかを、正確には知らなかつ

た」とも内省している。くわえて、グリーンが探しもとめる「誰か」が「美し」いだけでなく、「同意するような」誰かであると指摘されている点にも注意を払うべきである。いったい、何にたいして「同意する」のか。もちろん、肉の誘いにたいしてである。グリーンは《欲望の人間》として、美しい若者との快楽を望んでいる。この夜の彷徨は、ただ単に美の探索であるだけでなく、肉体的快楽をもとめての徘徊であると判定できる。

さてその夜、グリーンは小雨の中、アンリ・マルタン大通りからトロカデロ広場に向かう。「ハヴロック・エリスの本のなかで、大都会では、夜、ありとあらゆる年齢の男が快楽をもとめてさまよっているということをして」、グリーンは「読んだことがあった」(V、一三四九頁)。けれどもあたりには誰かいるように思われない。だがグリーンは後をつけられていた。「美しくはないが、自分と同じ年頃だったから、見た目に感じのよい」(V、一三四九―一三五〇頁) 男に、彼は話しかけられる。男はグリーンに、「ぼくたちは同じものを探しもとめているのではないか」(V、一三五〇頁) と問う。グリーンは「ウイ」と答える (V、一三五〇頁)。すると男の目には、「悲嘆のようなもの」が走り、「彼の人生と苦悶を要約しているがゆえに忘れがたい言葉」を口にする (V、一三五〇頁)。男は、「ぼくは結婚している」(V、一三五〇頁) と言うのだ。この事實は、グリーンには「障害」(V、一三五〇頁) のように思えたので、彼は男から遠ざかり、セーヌ河のほうに降りていく。すると、「イエナ橋から遠くないところで」(V、一三五二頁)、誰かがグリーンを待っていた。このときの記憶は『青春』のなかで、次のように喚起されている。

「雨の中、街灯の怪しい照明のなかで、私に近づいてきた見知らぬ男の概観を示すことを、私は断念する。昼間だったら、男の顔は私をこわがらせたことだろう。驚くほどに醜いその男は、悪徳の途方もない魅力を發揮していた。私は、猟師に征服されるけだもののように、屈することしかできなかつた」(V、一三五二頁)。

グリーンは「悪徳の途方もない魅力を發揮」する醜い男に、「猟師に征服されるけだもののように」屈服している。男に屈服するとは、「悪徳」の「魅力」に負けるといふことでもある。しかし、いかなる「悪徳」であるのかは、作中、具体

的には示されていない。ただ、家にもどったグリーンが、「異常な満足感」を覚え、「一種の動物的な恍惚感」(une sorte de béatitude animale) に満たされていることは明らかにされている (V、一三五二頁)。グリーンは、「もしこれらの言葉が意味をもちうるとすれば、私の全体が肉体になったように思われた」(V、一三五二頁)とも想起している。要するに、帰宅したグリーンは、肉体的なよろこびに浸されている。ここから、問題になっている「悪徳」が肉の快楽にまつわるものであり、「驚くほどに醜い」男とのあいだに、なんらかの肉体的交渉があったことが察知される。こうしてグリーンは、夜の散歩によって、純潔さをうしない、文字どおり《欲望の人間》として、快楽を漁る男に変貌するのである。

その翌日、グリーンは前の夜の自らの行動を思い出し、苦しみ、自己嫌悪に見舞われる。そして夜はけっして外出するまいと心に誓う。だが夜になると、欲望のとりことなつて、九時前に散歩に出かける。グリーンはクレベール大通りを歩く。ある建物の窓から、明かりがもれている。窓に近づくと、中は体操場である。そこでは、「ほとんど裸の若者たちがボクシングの練習をしている」(V、一三五二頁)。この光景はグリーンの「血を燃え立たせ」る (V、一三五二頁)。「青春」において、このときの心の動きは、こう描かれている。

「しかしどうしてなのか (この問いはしばしば私を苦しめた)、この表現しようのない、所有することへの欲望は？
見ることによつて美を享受するだけでは十分ではないのか？ この凶暴な飢えはどこから来るのか？ それに所有するとはどういうことなのか？ 所有したものはただちに取り上げられるのだ。私はこれらの接近できない青年たちを渴望しながら苦しんでいた。前日の欲望を鎮めただけでは十分ではなかった。ものすごくはげしい欲望が、臓腑を蝕む病いのように再び勢いを取り戻していた」(V、一三五二頁)。

グリーンはボクシングをしている若者たちを眺めながら、「所有することへの欲望」にとらえられ、「見ることによつて美を享受するだけでは十分ではないのか？」という問いを発している。グリーンにおける肉体的欲望は、もはや「見ること」だけでは癒やされない領域にまで達している。グリーンは前日の夜、「驚くほどに醜い」男を相手に快楽を得、欲望を満足

させた。しかし、「ものすごくはげしい欲望が、臓腑を蝕む病いのように再び勢いを取り戻していた」と思い起こしているように、グリーンは「接近できない青年たち」を目にすることによって、再び熾烈な欲望に攻めたてられるのである。

ところで、その夜、若者たちがボクシングの練習をするのを見ているのは、グリーンだけではなかった。肩と肩が触れ合うなどところに、「もう一人の見物人」(V、一三五二頁)がいた。その人物はグリーンに話しかけ、グリーンを自分の部屋に連れていく。この件りを読むことにしたい。

「彼は革命のとき、祖国から逃れてきたロシア人だった。質素な暮らしをすることに追いやられた彼は、ギャルリー・ラファイエットの隣りの建物の六階にある部屋に私を連れていった。平凡だが、ほとんどきたならしい環境のなかで、私は前日と同じ突然のよろこびを見いだした。だが私を滅ぼすようなよろこびだった。今後は私はだめになるのだ。今回は私は、貧困の臭いがする不吉な小さな階段を下りながら、そのことを理解した。本能にたいして、服従する以外に何もすることができなかつた。今後は、自分さまよい、探しもとめる人間になることだろう」(『青春』V、一三五二頁)。

欲望に支配されたグリーンは、前日の夜と同じように、行きずりの男を相手に束の間の快樂を獲得している。しかも今回は、相手のロシア人の部屋にまで行って、欲望を充足させている。グリーンは、「本能にたいして、服従する以外に何もすることができなかつた」と打ち明けている。これは明らかに罪である。グリーンもまた、「今後は私はだめになるのだ」(Désormais j'étais perdu.)と自覚しているように、そのことを知悉しているし、自分が宗教的な破滅への道を進んでいることを悟っている。ロシア人と別れて通りに出たグリーンは、「パリの歩道をつなぎ合わせれば、それはまっすぐに人を地獄に導くのだ」(V、一三五二頁)と想像している。夜の街を彷徨するようになったグリーンは、自分が地獄への道を歩んでいると認識していることが了解される。

一九六九年十一月八日付の『日記』のなかで、グリーンはこのロシア人と出会いを思い出しながら、ロシア人が、「自分

の青春時代の全体に、決定的な影響をもたらした⁵⁾と断定している。この出会いはグリーン我的生活を一変させたという点で「決定的な」ものとなった。先の引用文の終わり方で、「今後は、自分はさまよい、探しもとめる人間になることだろう」と推測しているように、グリーンは快樂の探索を目的とする夜の散歩・彷徨を習慣とするようになる。彼は『青春』のなかで、こう告白している。

「私の夜は放縦なものであったが、朝の間は勤勉でありつづけた。そして私の生活は、一九三九年の大激動のときまで変わることはないであろう梓組みのなかで組織された。毎晩、私は八時半に悪魔と会う約束をしていた。私はそのことを知っていたが、知らなかった。私の言おうとするのは、もしそのことを骨の髄まで知っていたら、私は外出することを恐れたであろうということだ。したがって、私は知らなかった。しかしそれでもやはり知っていたのだ。悪魔は月並なもの背後に隠れていた。若者が通りで時刻をたずねる。これ以上にありふれたことがあるだろうか。それにつづく愚かなおしゃべりに疑わしいものは何も無い。私の形而上的な悪夢から何が残るのだろうか。事の成り行きとそのくだらない魔術とによつて、すべてが平静にもどる。概して、この世の君はかなり惨めなホテルの一角を提供しさえすればよい。環境は変えられないとしても、彼は情念の錯乱のなかで、その環境を消し去ることは引き受ける。閉ざされ、安全な場所のなかにあるベッド、それだけで十分ではないのだろうか。そのあと、嫌悪が私をとらえるかもしれない、突然の深い嫌悪感だ。だがそれこそが私にかかわる問題なのだ。罪がおかされ、誘惑者は遠くに去る。犠牲者を良心の危機にゆだねながら。私の心をもつともかき乱したのは、どんなに嫌悪をいだいても、翌日の晩になると再び歩きまわりはじめるだろうという確信であった」(V、一三五六一—一三五七頁)。

グリーンはこの一節で、「一九三九年の大激動」まで、すなわち、カトリック教会に決定的に帰依するまで、「朝の間は勤勉でありつづけた」としても、夜は「放縦」であったこと、つまり「毎晩、(…)八時半に」夜の散歩に出かけ、「悪魔と会う約束をしていた」ことを知らせている。「悪魔」とは何か。グリーンが肉体的快樂を得る相手のことであり、散歩あるい

は快樂の探索のなかで出会う、行きずりの男のことである。性の本能に牛耳られたグリーンは、名前をもたない男と肉の交わりを結ぶことによつてしか、欲望のはけ口を見いだしえない。グリーンが肉の快樂に耽つていたことは、「この世の君はかなり惨めなホテルの一室を提供しさえすればよい。環境は変えられないとしても、彼は情念の錯乱のなかで、その環境を消し去ることは引き受ける。閉ざされ、安全な場所のなかにあるベッド、それだけで十分ではないのだろうか」と叙述しているところから明白である。しかし快樂を味わたのち、「そのあと、嫌悪が私をとらえるかもしれない、突然の深い嫌悪感が」とあるように、嫌悪感に襲われることも起こりうる。この嫌悪は性の本能に屈してしまったことへの反応である。そして「罪がおかされ、誘惑者は遠くに去る。犠牲者を良心の危機にゆだねながら」と綴っているごとく、グリーンは良心の呵責、罪悪感にさいなまれるのである。

グリーンが自らの行為を罪と認識していることは、彼が快樂を共にする相手のことを、「悪魔」(le diable)とか、「この世の君」(le prince de ce monde)とか、「誘惑者」(le tentateur)とか呼んでいるという事実によつて瞭然としている。「この世の君」がサタンを指し、「誘惑者」がフランス語で悪魔をも意味することは、言うまでもない。快樂のパートナーを「悪魔」 ∇ とみなす見方は、もちろん、『青春』執筆時点のものである。けれども、「私は知らなかった。しかしそれでもやはり知っていたのだ」という文章が示すように、夜の散歩に出かけていた時点のものでもある。『ジュリアン・グリーン、肉体と魂』という評伝を書いたルイ・アンリ・パリアスは、「毎晩、私は八時半に悪魔と会う約束をしていた」という一文を引き合いに出しつつ、「ここで、そう言っているのは回想録作者である。だが夜に外出していた若者はそのことを知っていたというより、予感していたのだ」と⁽⁶⁾と解釈している。グリーンは快樂のパートナーを、神から自己を離反させ、宗教的な滅びに導く者と感じ取っていたといえよう。しかしながら、グリーンは自己の淫蕩行為を罪であると承知しながらも、自らの生活習慣をあらためることができない。さいごに、「私の心をもつともかき乱したのは、(…)翌日の晩になると再び歩きまわりはじめるだろうという確信であつた」と明記しているように、グリーンは放蕩生活を本意ながらもつづけるのである。

グリーンは放蕩生活については、『青春』において、こののちも回顧されている。かいつまんで紹介しよう。第六十三番目の断章では、グリーンが快楽を体験したあと、家に帰って風呂に入る場面が見いだされる。

「私は、自分が言葉をかけた男にほとんど恨みをいだいていた。快楽のあとに嫌悪がつづいた。私は家の浴室に逃げこんで、一度ではなく、十度も石けんを使って体を洗い、こするまでやめず、眠っている家の静けさのなかで、たつぷり十五分ものあいだ水を流すのであった。まるで私にさわった見知らぬ、なじみのない手の記憶まで消し去りたいと願っていたかのよう。そして私からそうしたことすべてを追い払ってしまうような不可能な浄化を夢見ながら。

問題なのは悔恨ではなく、はげしい拒否をとまなう、病氣への恐怖であった。肉体全体は、その秘密の地帯をのぞけば、私には美しく思われた。性器をのぞいて、一切はエロチックだった」(V、一三六〇頁)。

グリーンははじめに、「私は、自分が言葉をかけた男にほとんど恨みをいだいていた」と報告している。「自分が言葉をかけた男」とは、快楽を共にする相手のことである。グリーンが相手から話しかけられることによつてではなく、自ら積極的に声をかけることによつて、アヴァンチュールを楽しんでいることが注意をひく。内気な性格であるにもかかわらず、グリーンが情念の言語を使えるほどまでに成長もしくは墮落したことがわかる。とはいえ、重要なのは、名前をもたない男を相手に快楽を得たあと、「嫌悪」をいだきながら帰宅し、「浴室に逃げこんで」いるという点である。グリーンは念入りに体を洗う。彼はなぜこのような挙動におよぶのか。「まるで私にさわった見知らぬ、なじみのない手の記憶まで消し去りたいと願っていたかのよう」と振り返っているごとく、快楽の思い出を記憶から消し去りたいのであろう。また、「不可能な浄化をしたいのでもあろう。放蕩生活をつづけているとしても、グリーンは行為からは純粹志向が見てとれる。

けれども、グリーンは脳裡を支配し、浴室での行為をもたらしめるものは、第二段落で指摘されているごとく、とりわけ「病氣への恐怖」(une horreur des maladies)である。「病氣」とは何か。さいごの、「性器をのぞいて、一切はエロチックだつ

た」という文から推察できるように、性の病いのことである。「病氣」は複数で示されているが、単数で言われてもよいものである。グリーンにおいて、「病氣」とは特に梅毒を指す。『青春』の別の箇所には、「病氣、二〇年代のわれわれ若者たちの恐怖の的、すなわち梅毒」(V、一三九九頁)という表現も見られる。グリーンの母方の叔父ウィリーは女中との関係から梅毒にかかり、癩人同様となって他界した。この忌まわしい思い出は、死の床にある母親からグリーンに伝達された。近親者の一人が性の病いで死んだという事実が作用して、グリーンの場合、病氣⇨梅毒への恐怖は人並み以上にはげしかった。グリーンは病氣への恐怖をいだきながら、放蕩に身をゆだねていたのである。

グリーンの放蕩は男性を相手にしたものであり、同性愛を基盤にしている。いったい、グリーンは宗教とのかかわりで、同性愛の性行為をどのようにみなしていたのであろうか。この点に関連して、『青春』では、一九二三年のある日、グリーンが散歩中に会った若者を家に招き入れ、肉体関係をもったあと、その若者に聖書を読ませる挿話を目にする事ができる。

「ある日、姉たちと父が外出していたので、私は、どこかわからない所で出会った若いオランダ人を、自分の部屋に迎え入れた。彼は背が高く、煉瓦のような顔色と並はずれた青色の目をしていて。私たちの欲求を満たすとすぐ、英語訳の聖書のほうに手を伸ばそうという常軌を逸した考えが浮かんだ。私は聖書の、「ローマ人への手紙」の第一章のところを開いた。

《ここだ》と私は言って、相手に本を差し出した、《ぼくたちがやったことを考えたまえ。第二十七節とそのあとの節だ》。

彼はその一節を読み、忘れがたい目つきをして本を返した。

《君は信者か?》と私は彼にたずねた。

彼は頭でそうだと言ったが、驚きのために口がきけなかった」(V、一三九七―一三九八頁)。

グリーンはオランダ人の若者に、「ローマ人への手紙」第一章第二十七節を読ませている。第二十七節は、「男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである」という文からなる。この箇所では、男と男との同性愛の関係が自然に反するものとして断罪されている。同性愛の欲望は聖書またはキリスト教の世界では、呪われたものである。では、グリーンはどのようにしてこの部分をオランダ人の若者に読ませるのであるのか。この引用文のあと、「回心させたいというはげしい欲望が、まさしく心ならずも私を支配していた」(V、一三九八頁)と彼は説明している。聖書のこの箇所を若者に読ませることによって、若者を呪われた生活から立ち直らせ、神のもとに回帰させたいという思いに、グリーンはとりつかれたのである。だが、「ローマ人への手紙」第一章第二十七節の言葉は、オランダ人の若者だけでなく、グリーンじしんにも向けられている。「私は私自身をも断罪していた」(V、一三九八頁)とグリーンは認めている。同性愛の欲望を有するがゆえに、彼は自分を罪ある者と判断していた。このあとグリーンは、「私のなかで軽い眠りで眠っている狂信者の反逆を前にして、私は自分が無力なを知っていた」(V、一三九八頁)と顧みている。グリーンの中の「狂信者」(fanatique)は罪ある他者を回心させようとしむけるだけでなく、自己の同性愛の欲望を断罪し、罪ある生活を清算するようにもうながすのである。

このように、グリーンは一方では、聖書の記述にもとづいて、同性愛の欲望を特別視する。しかし他方では、同性愛の欲望を男女間の愛の欲望と同じレベルで考える発想をも有している。たとえば、グリーンは『青春』のなかで、夜の散歩の習慣を想起しつつ、次のようにしたためている。

「どちらも快樂のことしか気にかけていないのに、正常な人間と異常な人間とが区別される古典的なカテゴリーを、私は故意に無視しようとしていた。本質的に罪は同じなのだ。というのも罪が存在するのだから。

私の内心の一切が、罪が存在すると叫んでいた。彼らはそのことを知らなかった、彼ら、巨大な多数派のつみびとたち。だが私は知っていた。この点において、私は人びとの群れから切り離されていた。私は自尊心に避難所を見いだ

していた。このひそかな自己満足を、私はどれだけはぐくんでいたことだろう……その自己満足は内心の混沌のなかで、一種の精神的安定を回復させるのに役立つた。滅びに向かつて歩んでいるとしても、少なくとも私は目を大きく見開いて歩んでいた。しかしそのことは何を意味するのだろうか？ 私にかんしては、地獄はあり得なかった。(…)私は、自分が気に入ってたどっている道がどこへ導くかを、知らないわけではなかった。けれども、それらの道を最後までたどることはないだろう。私はそのことを確かだと思っていた」(V、一三六四—一三六五頁)。

前半の段落で、グリーンは性愛の領域において、「正常な人間」(normaux)と「異常な人間」(anormaux)とに分類する従来のやり方に抵抗感を覚えていたことを告げている。ここでの「異常な人間」が同性愛者のことであり、「正常な人間」が異性愛者であることは、言を俟たない。人間が性的快楽を追いもとめるとき、欲望の対象が異性であっても、同性であっても、同じではないかと、グリーンは考えている。「本質的に罪は同じなのだ」と強調しているように、同性愛にかかわるものであれ、異性愛にまつわるものであれ、人が肉体の罪をおかすとき、罪であることには変わりはないと考察している。グリーンにとって重要なことは、罪の自覚があるかどうかという点である。後半の段落で、グリーンは、「私の内心の一切が、罪が存在すると叫んでいた」と言い、自分には罪の意識があったことを肯定している。これにたいして、「巨大な多数派のつみびとたち」、別の言葉でいえば、大多数を占める異性愛者たちは「そのことを知らなかった」とグリーンは断じ、彼らが「罪が存在する」ことに気づかず、罪を自覚していなかったと主張している。罪を自覚する人間と、そうでない人間のうち、どちらが地獄に近いか。当然、罪を自覚しない人間である。グリーンは自らの罪を認識するがゆえに、「滅びに向かつて歩んでいるとしても、少なくとも私は目を大きく見開いて歩んでいた」と言明しているように、自分が宗教的な破滅に向かつて進んでいることをわかっている。グリーンは、「私は、自分が気に入ってたどっている道がどこへ導くかを、知らないわけではなかった」と伝えている。彼は、自分の放蕩生活が地獄に導くことを承知している。しかしグリーンは罪を自覚するがゆえに、「けれども、それらの道を最後までたどることはないだろう」と確信している。だからこそ、「私にかん

しては、地獄はあり得なかつた」と言い切れるのである。繰り返して言うように、自分の罪を意識するということがグリーンには大事なのであつて、罪の内容は問題ではない。異性愛の罪も、同性愛の罪も、彼にとっては同じである。とはいへ、生殖という目的のために正当化しうる異性愛の欲望とはちがつて、同性愛の欲望は正当化される余地がまったくないために、前者以上に深刻な、罪の意識を生じさせることはたしかである。

またグリーンは『青春』の終わりのところで、自己の同性愛の性向に言及して、「その性向は私の考えによれば、肉の一般的な領域にもどるのであつた」(V、一四六七頁)と書いている。グリーンは同性愛の性向を必ずしも特別視していなかつた。グリーンは、「娘たちを追いかける結婚した男の不品行」と、彼のように、「青年たちを追いもとめる若者の不品行」とのあいだに、「道徳上の観点から見て、いかなる相違も認めて」いない(V、一四六七頁)。どちらの「不品行」も有罪であることに変わりがなく、「私はすべてをひとまとめに断罪していた」(V、一四六七頁)と振り返っている。ここでは、同性愛者の「不品行」だけを特別扱いすることへの疑義ないし反撥の念が看取できる。

さらにまた、グリーンは『青春』のなかで、こう述懐している。

「私は重要な少数派に属していた。しかしながら、その少数派が古代のギリシアにまったく似ていないこと、たいする不満の気持ち、心に浮かんだものだった。それに私は、自分自身を受け入れることに苦勞していることを忘れていた。私が拒否していたのは、多数派のものであると、なかつたら、性欲全体であつた」(強調はグリーン。V、

一四〇九頁)。

グリーンは、現代の少数派(同性愛者)が「古代のギリシアにまったく似ていないこと」にたいして「不満」の感情をいだいている。周知のように、古代ギリシアでは、同性愛者は多数派であり、同性愛は公然と展開され、陰湿なところは少しもなかつた。これにたいして、少数派に転落した現代の同性愛者はひそかな、隠微なたちでしか、欲望をかなえることができない。この現実の違いを、グリーンは視野に入れているのだと思われる。さて、グリーンは、「自分自身を受

け入れることに苦勞してい」たと語っている。「自分自身を受け入れる」とは、どういうことか。《欲望の人間》としての自己を容認するということであろう。ところが、グリーンは淫蕩の生活をつづけながらも、欲望を罪惡視する。グリーンはさいごに、「私が拒否していたのは、多数派のものであらうと、なからうと、性欲全体であった」と断言している。彼が拒否するのは、性欲じたいなのであつて、多数派（異性愛者）のものであらうと、少数派（同性愛者）のものであらうと同じである。グリーンにとつては、どちらのものであつても、性の欲望は罪である。ここでもまた、同性愛の欲望を呪われたものとして特別視する見方への疑義の念が見てとれる。

ところで、一九二四年といえば、アンドレ・ジードが『コリドン』を発表した年である。『コリドン』は同性愛を擁護した作品であり、そこでは、同性愛が自然に反したものではない点が力説されている。『青春』において、この作品のことが触れられている。

「ジードの『コリドン』は当時、大変な騒ぎをひき起こしていた。誰かがその作品を私の目の前に置いた。私はよろこびをいざくことなく、それを読んだ。自分の素行を正当化するために、作者が引き合いに出している昆虫の素行が、私に何の役に立つというのだろうか？ 彼は真面目なのか？ ただ真面目なふりをしているだけなのだろうか？ これだけの簡単な判断をくださったあと、私はその小さな本をほったらかしにした。私の問題にかかわるものは何も見いだせなかつたからである。私にとつては、快樂のいかなる形態も、それにどんな名前を与えようと、疑わしいものであつた」（Ⅴ、一四四七—一四四八頁）。

グリーンはジードの『コリドン』を評価していない。なぜならジードは欲望をふくめて、同性愛を正当化しようとしており、グリーンのはうは、肉体的な欲望を、同性愛のものであれ、異性愛のものであれ、敵視ないし罪惡視しているからである。グリーンはさいごに、「私にとつては、快樂のいかなる形態も、（…）疑わしいものであつた」と明言している。グリーンにとつて、同性愛の快樂を含む、いかなる性的快樂も弁明できないものとしてある。したがつて、グリーンは、たとえ同

性愛を擁護した作品であるとしても、『コリドン』に共感することができない。またグリーンは自伝のなかで、こう書き記している。

「ジードの『コリドン』の刊行につづく論争は、私にはつまらないもののように思われた。というのも、それらの論争は最大の問題を無視していたからである。最大の問題とは、肉・体・と・魂・と・の・争・いであり、あるいはむしろ、私の年頃の恐ろしく単純化する考えによれば、肉・体・と・魂・と・の・あ・い・だ・の・永・遠・の・戦・いであった」（V、一四六七頁）。

グリーンは、自分の興味をひく問題が、「肉・体・と・精・神・と・の・争・い」というより、「肉・体・と・魂・と・の・あ・い・だ・の・永・遠・の・戦・い」であったと告知している。グリーンは放蕩すなわち同性愛の欲望に身をゆだねながらも、そのことを罪と考える魂の持ち主であった。彼のなかの魂は《欲望の人間》としての自己をつみびとと認識し、この自己とたたかい、否定しようとする。グリーン
のなかには、二人の人間が存在する。《欲望（肉体）の人間》と、神をもとめる霊的存在としての《魂の人間》とである。グリーンが快楽を共にする相手のことを「悪魔」と呼んでいるという事実は、このことを端的に示す。すでに引用したように、グリーンは過去の放蕩生活を反省しつつ、「毎晩、私は八時半に悪魔と会う約束をしていた」と表現している。快楽のパートナーが \wedge 悪魔 \vee であるとの見解は自伝執筆の時点のものであるが、同時に夜の散歩に出かけていた時点のものであることは、先述したとおりである。グリーンは罪意識をいだいており、全面的に《欲望（肉体）の人間》になりきっていたわけではない。グリーン
のなかには、《欲望の人間》であることを拒絶する魂が存在する。なるほど同性愛者は肉欲をいだいたからといって、異性愛者以上に、つみびとではないかもしれない。しかしつみびとであることは厳然たる事実である。ジードの『コリドン』は魂と罪の問題を無視しているがゆえに、グリーン
の賛意を得ることができないのである。

グリーン
の肉体生活を概観したあと、彼が同性愛をどのように考えているかを見てきた。グリーンは聖書のなかの「ローマ人への手紙」第一章第二十七節の記述にもとづいて、同性愛の欲望を特別視することもないではないが、おおむね同性愛の欲望と区別していないように思われる。どちらの場合も罪であることに変わりはないからである。とはいえ、グリーンは

同性愛の性向を有することで、異性愛者よりも、欲望にたいする罪意識を鮮烈にいだいたと論定しうるのではないだろうか。このことは、グリーンが快楽のパートナーを△悪魔▽と知覚しているところから明確であるし、同性愛の欲望との関連で地獄意識をもっているという事実からもうかがうことができる。グリーンが地獄への意識についてはすでに触れているが、別の例を挙げよう。一九二三年の十一月、グリーンはとある館の一室で、名前をもたない男と肉体の交わりを結ぶ。ところが、相手の男はグリーンを「好いてはいなかった」(Ⅴ、一三八九頁)。「それどころか彼は私を嫌っていた、私はそのことを感じていた」(Ⅴ、一三八九頁)とグリーンは付言している。そして「私は彼の同意の代金を支払った」(Ⅴ、一三八九頁)と述べているように、グリーンは、相手の男がベッドを共にしてくれたことへの報酬を支払う。男は立ち去る。一人残ったグリーンは「迷いからさめ」、「嫌悪と恐怖」の気持ちを味わう(Ⅴ、一三八九頁)。「嫌悪」とは、どうしようもない性の欲望に屈してしまったことに源を発している。「恐怖」は、そのことにたいする宗教的な恐れであり、自らの救いへのはげしい不安である。それからグリーンは「息のつまりそうな悲しさ」(Ⅴ、一三八九頁)の感情にとりつかれる。「悲しさ」とは、自分が愛していないし、自分を愛してもいない男、それどころか自分を嫌っている男に、金を支払ってまで快楽をもとめないではいられない惨めな自分の肉体的現実にたいする思いである。「私は地獄にいた。この息のつまりそうな悲しさ、それが地獄だった」(Ⅴ、一三八九頁)とグリーンは言っている。グリーンが自分の内心を襲う「悲しさ」を「地獄」ととらえるのは、孤独の苦悩にさいなまれていくからでもあろうが、自己の惨めな肉体的現実を罪深いものと感じているからだと思われる。このあとグリーンは、「地獄墮ち」という苛酷な現実が私のまわりで体系的に組織されつつある」(Ⅴ、一三八九頁)との印象をもつ。彼は「地獄墮ち」の感覚に見舞われる。部屋を出、階段を下りながら、グリーンは次のような思いにひたっている。

「今や私は、地獄がはっきりした場所にあるのではなくて、私たちの中にあること、そして私が私の地獄を自分といっしょに持ち歩いているのだということを確認していた」(Ⅴ、一三八九頁)。

このように、グリーンは地獄意識をいだいている。結局のところ、グリーンにおいて、地獄とは欲望のことにほかならない。彼が欲望を地獄と理解するのは、人並み以上に、欲望を罪と結びつけているからである。グリーンが地獄意識を有しているという事実から、欲望が、彼の場合、同性愛のものであるだけに、異性愛の欲望よりも苛烈な罪悪感をひき起こしていると論断することができる。

註

- (1) 目次の二までの部分は、「ジュリアン・グリーンの〈青春〉(二)」として、山口大学「独仏文学」第二十八号(二〇〇六年十二月)に発表。
- (2) 『青春』は、合計百三十五の断章から成り立っている。
- (3) チャールズ一家は原則として、アメリカで生活していた。なお、チャールズは一八八五年生まれで、ジュリアンより十五歳年上である。
- (4) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四七年日付なし、IV、九七四頁。この義理の兄の発言については、自伝『夜明け前の出発』でも触れられている。自伝では、「お前は、これまでに見る事ができたなかで、たぶんもっとも醜い男の子だろう」(V、七五二頁)と義理の兄が言ったことになっっている。
- (5) 『残された日々』、『日記』第九卷、V、五三七頁。
- (6) Louis-Henri Parias: *Julien Green, corps et âme*, Fayard, 1994, p.117.
- (7) 訳文は、日本聖書協会発行(一九七二)の聖書による。
- (8) 一九九〇年七月二日付の『日記』には、この若者との出会いのことが触れられ、出会ってから「数年後、おそらく八年後」に、「『私の恵みはあなたに対して十分である』と言う声を聞いたあと、自分の生活を変えた」と伝える、若者からの手紙がきたことが報告されている(L'avenir

n'est à personne, Journal 1990-1992, Fayard, 1993, p.104)。